

コロナ禍で思うこと

2020 年 10 月 12 日

静岡県評事務局長 廣瀬 勤

はじめまして、静岡県評の廣瀬です。

私が、県評の事務局長の大役を仰せつかって、早いもので 1 年が経ちます。この 1 年、何をどのようにやってきたのか？また、県評の事務局の皆様や単産・単組の皆様に、どのような苦労や迷惑をかけてきたのか？数えきれない数だと思います。

今年は、新型コロナウイルス感染症の世界的な広まりにより、「ソーシャルディスタンス」が呼びかけられ、「人が集まり・話す・寄り添う」ことが出来なくなり、労働組合運動にも影響がありました。

安倍前首相が、発出した様々な施策「緊急事態宣言」「学校休校」等、諸々のイベント・スポーツが、中止・自粛や縮小され、地域活動や国民生活に変化をもたらしました。

医療・介護・福祉の労働者は、本人はもちろん、利用者や家族への感染予防対策におわれ、日々奮闘しているにもかかわらず、誹謗や中傷があるということです。いつ、どこで感染するか分からない中、傷つけあっても意味はありません。「コロナより怖いのは人間だ」と言う人もいます。今、政治に求められていることは、防護資材の確保や PCR 検査体制の整備、そして財政支援の強化による補償をすることだと思います。

コロナ禍でも静岡県労働研究所は、さまざまな問題に対し、活動を続けています。

静岡県内で働く労働者の権利や暮らしをテーマにした定例会を開催し、多くの問題をひとつひとつ、分かり易く解説し、学習していく姿勢には、心から感謝いたします。

コロナ終息後の働き方が大きく変わることが予想されます。テレワークを中心とした働き方により、生活している地域の賃金（最低賃金）が、正当化され、今以上に都会と地方の格差が拡大するのではないのでしょうか？「同一労働・同一賃金」の意義を、幅広く知らせること（学習すること）が大切になります。

今後も、静岡県労働研究所の活動は、多くの労働者に学習の大切さを知らせ、問題意識を持たせてくれることでしょう。